

必要とされ続けるために：私はこうしている

眞喜志まり*

東邦大学 習志野メディアセンター

I. はじめに：研究発表のきっかけ

今回の特集にあたり、編集委員の方からお問い合わせをいただき、これから研究発表をしようとしている若手の方に向けて、発表したり論文を書いたりする際のヒントになるような特集を組みたいという目的をうかがった。気持ちはいつまでも初心者なのだが、この業界に飛び込んで今年で13年目になった自分の立ち位置を再認識した。今まさに、我が子の“小1の壁”と仕事とのバランスにもがき苦しんでいる私をみて、同じようにもがいている方、そして近い将来この壁に立ち向かう方々に、ほんのわずかでも力になればと思って執筆をお引き受けした。もちろん、そうではない方にとっても何かしらのヒントになれば幸いである。

私が発表や調査を行うようになったきっかけは、病院図書室司書として働いていた際、仲間に誘われて勉強会に参加するようになったからだろう。誘ってくださった方は人望や能力もあり、職場のみに留まらず、医師や看護師、コメディカルスタッフ、編集者など、多職種の集う勉強会グループに参加されていた。初めて参加した際は、交わされる専門的な内容や忌憚のないディスカッションに理解が及ばず全くの異空間で気後れしていたことを今も覚えている。まだ研究も発表も自力でやったことがない私にとっては、自分のいた世界の狭さと実力のなさを突き付けられた出来事でもあった。こんな時、“やっぱり自分にはできない”と思うか、悔しさで“もっと経験を積もう！”と思うかで、その先はずいぶん違ってくるのだろうが、私は後者であった。理解できない、上手にできない、はまだ自分に経験が足りないからであって、できないのではないはず。理解できなかったら理解できるよう自分で調べたり、周りに聞いてみたり、すぐに上手にはならなくても何度も練習を重ねれば、

きつとあこがれの●●さんの足元くらいには達するかもしれない。そう信じて、研究や調査のやり方について学習し、誰かの前に立って説明するといった経験を重ねた。

それから数年、毎年その勉強会に参加させていただき、いつの間にか（気が付くと）司書という立場で情報の扱い方のヒントを紹介していた。異職種同士の参加者全員が、全力で私の話すことを理解しようとしてくれていることを肌で感じ、知らない分野のことでも共に学ぶという姿勢に感動を覚えた。もっとこの中で、この方々に役立つことを伝えたいと感じ始めたことが、何かを調べたり、書いてまとめたりすることへとつながっていった。

II. 私にとっての研究とは

1. 当たり前の裏にある新しい発見

「研究」と言えるほど大それたことはしていないが、研究とは何かについて少し考えてみたい。研究 (research) とは広辞苑¹⁾によると「よく調べ考えて真理をきわめること」であり、Oxford英英辞典²⁾には「a careful study of a subject, especially in order to discover new facts or information about it (特に新しい事実やそれに関する情報を見つけるために、対象を慎重に調査、観察すること)」と記載がある。疑問について不明な部分を調べ、答えを探すこと、その疑問を科学的なプロセスを踏んで調査し、報告する過程そのものが研究である。つまり、研究の第一歩は疑問である。何かを調べたりすることは疑問から始まる。科学的とは、「一方的な『感情 (主観)』『思い込み』『コツ』『独善』によらず『観察』『実験』といった客観的な根拠に基づいて『筋道 (理屈)』を立て『現状を認識する過程 (process)』」とされている³⁾。つまり、研究の第一歩は疑問である。何かを調べたりすることは疑問から始まる。「Research is to see what everybody else has seen, and think what nobody else has thought. (研究とは誰もが見たことのある物事を見て、誰も考えなかったことを考えることだ)」これは1937年にノーベル生理学賞を受賞したセント＝ジェルジ・アルベルト (Albert

*Mari MAKISHI : 〒274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1.

Tel.047-472-1408 makishi@mnc.toho-u.ac.jp

(2019年4月5日 受理)

Szent-Györgyi) 氏の言葉である。私たちは普段あれ?と思うことがあっても、“まあそんなもんか”と流してしまったり、あれ?と思うことすら少なくなってしまうたりしているかもしれない。あれ?どうして??の気持ちが大切だとジェルジ氏は言っている。疑問を持つには、好奇心と観察、仮説(推察)が欠かせない。これらは、私の場合は自分の個人的な経験から降って湧くことが多い。あるいは業務としてテーマを与えられたり、ふと目を通した資料が刺激となったりして、疑問・問題の発見につながるが多い。好奇心のアンテナがビビッと反応したとき、これってどういうこと?と研究へのモチベーションが湧いたところで、メモ程度でもよいのでその気持ちを文字にしてみるのだ。誰もが知っている当たり前の裏には、まだわかっていないことが隠れているかもしれない。

例えば、11~12年前、私は先の勉強会で、特にシステムティック・レビュー(以下、SR)という検証の方法に興味を持つようになった。最初にその概念や図書館員として関わるができる方法について調べ、自分なりに理解をした。そうやってSRについて少しずつ知識を深めているところに、SRの文献検索の部分で参加する機会があり、実際にやってみて“どうすればより網羅的な検索ができるのだろうか”という疑問を持つようになった。そこで、SRのための網羅的な検索について調査した文献を読み漁った。その中から、“同じことをやってみたらどういう結果になるのだろうか?”と、自分にもできそうな内容の調査を真似てみた。MatthewらのEpidemiology and Reporting Characteristics of Systematic Reviews of Biomedical Research: A Cross-Sectional Studyを日本の文献検索データベースを使用し、規模を小さく簡素化し、真似てみた調査が2015年医学情報サービス研究大会でポスター発表したシステムティック・レビューにおける文献検索である。真似てやってみた結果を一度整理することで、もっとこうやればよかったと気づくところもあり、次の調査につながる。それを文字にして誰かに見てもらうと、意見を頂戴できたり、自分では気づけなかった点を発見できたりする。

また、誰かが話すのを見聞きしたり、誰かの文章を読んだりしたときに、わかりやすいと感じた話し方や記述方法、見やすいスライドや資料についてメモしておき、自分のストックにしている。それが自分の調査・発表のお手本となる。これから何か調べ物や研究を始めたいという方には、自分がわかりやすい・見やすいと感じた発表の仕方や文章の書き方をたくさんストックし、まずはそれを真似ながら頭と手を動かしてみることをお勧めしたい。

2. どうして研究するのか? : 自分が必要とされ続けるために

私は縁あって、2009年から子供を出産する2011年までと、成長した子供を連れて2017年と2018年にアメリカの医学図書館員が集うMedical Library Associationの年次総会に参加する機会に恵まれた。アメリカの特に大学図書館司書は専門職で、図書館情報学修士号と専門分野での修士号・博士号取得が求められる。部門ごとに担当が明確でアシスタント、シニアアシスタント、マネージャーなどと職位と責任が分かれる。そこに参加していたライブラリアンたちは皆、学ぶ意欲と自信にあふれているように映った。日本の図書館員がそうでないわけではないが、モチベーションの温度差を毎度実感して帰国し、しばらくは自分も熱い気持ちで頑張ろう!と思うことができる場である。2019年の年次総会はシカゴで開催予定だが、大会スローガンの“Elevate(向上, 高める)”に沿って、スキルごとにプログラムが用意されている。総会案内ページを眺めてみるだけでも、刺激になる⁴⁾。「Librarian educators never stop learning. Elevate your skills and knowledge in teaching evidence-based practice (EBP),」 「Librarians are at the cutting edge of innovation and research.」⁴⁾などと、変化し続ける時代と技術に合わせて、知識や能力をアップデートし続ける必要があり、自分たちにはそれができるのだ!という意識の高さを感じる。自分が必要とされ続けるには、イノベーション(一般的には技術革新などと言われる。本稿では幅広く新しく取り入れること、取り入れたものを意図する)と研究の最先端で自分も成長し続けなければならないのである。

III. 研究・調査した結果を発展させる

自分が研究した結果を公表することは、新たな知識体系の構築に貢献することにもつながる。一般的には、学会で発表したり、論文にまとめたりする方法がある。同じ学問分野や職業分野の仲間が集う学会に出かけ、口頭発表やポスターセッションで報告する場が学会発表である。口頭発表は文字通り参加者に口頭で自分の調査について発表し、学会に参加している多くの人に聞いてもらうことができる。ポスター発表は自分の調査を示した資料(ポスター)を掲示し、決められた時間に自分のポスターの前に集まってくれた参加者に対し説明を行うもので、学会会期中参加者の自由なタイミングで自分の発表を見てもらうことができる。口頭発表のように、いきなりたくさんの参加者の前で、決められた時間内に自分の考

えを話すのは勇気がいるので、小心者の私は、自発的な発表はもっぱらポスター発表ばかりである。また、現在の私のライフステージにおいても幼児を連れての参加の都合上、演壇に上がっての発表は困難なため、ポスター発表というスタイルは選択しやすいものでもある。最初の内はポスター発表で経験を積むことをお勧めしたい。

ただし学会発表には、その場に参加した人の中でのクローズドなコミュニケーションとなってしまう側面があり、参加できなかった人には（運が良ければウェブで公開された抄録を眺めるくらいはできるが）どんなに興味深い発表があっても聴くことができない。そこで、論文にまとめるという作業をもうひと頑張りすることで、より多くの人に自分の考えを目に留めてもらえるチャンスを広げることができる。

学会発表や論文執筆の方法論については、専門家が多数まとめているので、自分がわかりやすいと思える資料を参考に手を動かすのみである。私がお世話になっている資料を挙げるならば、ライフサイエンス系図書館員ならご存知かもしれない医学情報サービス研究大会（MIS）の第31回時に実行委員会によって作成された「“QOL” for MIS31～学びの質を高めるために～」⁵⁾と、その中でも紹介されている『トム・ラングの医学論文「執筆・出版・発表」実践ガイド」⁶⁾を紹介したい。

IV. 発表や書くために大切なこと：時間コントロールと意識

まずは、時間のコントロール術を身につけることをお勧めしたい。調査・発表をするには、ある程度のまとまった時間が必要となる。しかし、自分でコントロール可能な時間は、人それぞれライフスタイルやライフステージによって異なる。保育園児（4月からは小学1年生）と生活している私の場合、子供を起す6時半までの間に、家事と子供の登園準備と自分の調査や書き物時間をコントロールしている。また、“何時間も書く”というのは苦手なので、まずは“1. 緒言 2. 目的 3. 方法 4. 結果 5. 考察 6. 結論”と項目を書いて、“今日は緒言の日”、“今日は目的の日”というように区切って書くようにしている。日によってはすうっと考察まで書きあげてしまうこともあるが、緒言の緒だけで筆が進まなくてもそれはそれでよしとしている。疑問やふと思いついた仮説で動き出した思考を原動力に進めてきても、情報を整理したり、文章にしたりしようとする途端に手が止まってしまう。それでも他の人が書いた研究論文や自分の目の前にある調査結果を何度も何度も見

返して、やっと文章をひねり出すという作業を行っている。書いては消して、書いては直しての作業を繰り返して生み出した文章や発表資料を、人目にさらす前に今一度見直してみる。

この時意識するようにしていることがある。(1)単純であること(2)確実であること(3)統一がとれていること(4)見やすいこと³⁾の4つと“急いでいるときほど丁寧に”ということである。以前上司に発表資料のチェックをお願いした際「やったことを活字で表現する際、（大切なところを端折らず）丁寧に表現すれば質の高いものになる」と言われた。この言葉はその後何かを文字にする際、あわてんぼうの私にとって一番大切な呪文となっている。

口頭発表やポスター発表で話す際も同様に、時間コントロールと上の5つを意識することが大切だと考える。話す時間（質疑応答の時間含め）は主催者が割り当てた時間を守るよう、自分が話している時間をきちんとコントロールしながら発表すること。自分が調べて分かったことを読む（見る）人や聴く人に正確に伝える。貴重な調査結果を持っていても、整理して伝えないと正確には伝わらないし、理解してもらえない。せっかくの調査が台無しになってしまう。何かを発表したり書いたりする際には気をつけたい。

V. 最後は練習と経験

演題・論題に関して期待通りの内容が提供される発表は、聴く人や読む人を惹きつけ、理解されやすいと考える。私も人前で話すのは苦手なのだが、なるべく正確に伝えることができるよう発表スライドを使って事前に何度も何度も練習したり、文章を推敲したりして人前に立つ（出す）ようにしている。しかし、練習や経験を重ねたとしても、必ずしも緊張せずにいられるようになるとも限らないので、シナリオをお守り代わりに持ちながらの発表でも構わないと考える。“やってみる！”その気持ちこそが前に進む力となる。また、たとえ自分では振り返りたくないほどの失敗だと感じる経験になったとしても、それは失敗ではない。経験を積み重ねることは必ず自分の財産になると信じている。

VI. おわりに

ここまでエピソードのように私の経験と考えを綴ってきた。仕事と子育て、一つだけでも大変なことを同時期にこなさなければいけない図書館員の例として、読んでいただければ幸いです。ここまで、そして今仕事と

子育てを両立していただけるのは、正規雇用で、子育てに理解のある職場や職員の中で働いているという恵まれた環境があるおかげでもある。私はこれからもその期待にこたえられるように、そして、これから研究や発表をしようとする方々に多くのチャンスと協力が与えられることを祈念したい。

参考・引用文献

- 1) 新村出編. 広辞苑. 第7版. 東京:岩波書店;2018.p.936.
- 2) Hornby AS. Oxford advanced learner's dictionary of current English. 9th ed. Oxford:Oxford University Press;2015. [internet]. <https://japanknowledge.com>
- 3) 小林宣泰. 「研究方法」入門:アイデアを研究にするための13の講義. 東京:協同医書出版社;2006.p.3.
- 4) Medical Library Associaton. MLA'19 General Information [internet]. <https://www.mlanet.org/mla19> [accessed 2019-04-03]
- 5) MIS31 名古屋大会実行委員会 [“QOL” for MIS31 ~学びの質を高めるために~] [internet]. http://mis.umin.jp/31/pdf/MIS31QOL_20140224.pdf, <http://www.slideshare.net/satomikojima750/mis31-qol-20140224-34934408> [accessed 2019-05-22]
- 6) Lang TA (宮崎貴久子, 中山健夫監訳). トム・ラングの医学論文「執筆(ライティング)・出版・発表」実践ガイド. 東京:シナジー;2012.